『支え』

大野 夏凜

塾から帰宅すると21時を回っていた。小学校最後の冬、中学受験を目前に私は毎日塾に通っていた。

朝から晩まで勉強した。悔しくて涙が出た。先生に叱咤激励されて泣いた。怒られたから泣くんじやない。そんな時期はとうに過ぎた。

帰りの車の中で母にもこっぴどく怒られた。この時期に有り得ない点数だと。朝8時からフル回転させ続けた幼い、私の小さな脳みそは疲労困憊し、なんとも感じなくなっていた。

脱衣所で、食わずに寝ようと思った。口もきけないくらい疲れていた。祖母の声がする。

「お味噌汁温めるわね。親子丼、今から作るから。」
ハッとする。

祖母は私が帰ってくる時間に合わせて作ってくれる。毎日、毎晩、来る日も来る日も。何の為にそんなことをしてくれるのだろうか。

軽い空腹を無視して寝ることは容易い。しかし、この時間まで、出来たての料理を食べさせる為に作り置きせず待っていてくれた祖母の気持ちはどうなるのだろうか。

「食べる。」

ここ数週間で初めて違う涙が出た。自分が苦しいと周りが見えなくなる。そんな時、ふと俯瞰して自分を見ると支えてくれている人達がいる。

その輪の一番近い場所に居てくれているのが家族だと思う。